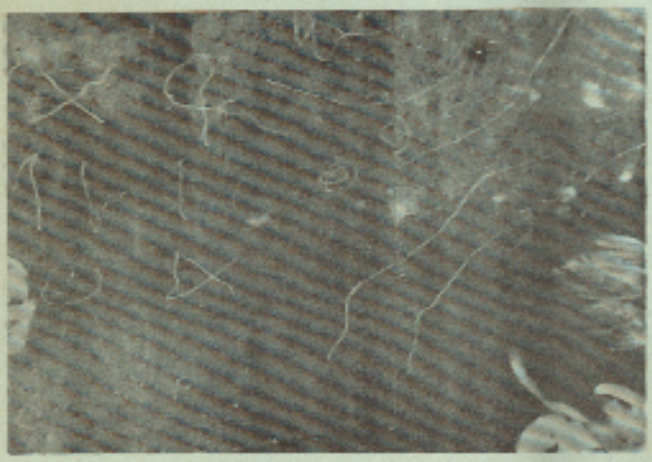
UFOと宇宙哲学の研究誌

－日本GAP－

ニューズレター



No.39

UFOと宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター
コンタクト特集号

1969
第39号目次

バレイアに出現した怪人……H・B・アレイシュ 1
バレイアの怪人が再度出現？……ニジェル・リメス 9
ノースキャロライナ州の"小人"撮影事件……J・A・キール 14
レユニオン島のコンタクトによる災難事件……G・クレイトン 17
メンドサの或る日……チャールズ・ボウエン 20
UFOと地震……G・クレイトン 25
念写……巽 直道 27
ミラコヴィッチ夫妻の目撃事件……W・ダニエルズ N・ターナー 28
レーダーマン 高橋忠春氏……32

表紙の写真はUFO怪人が自動車の車体に残した
記号類。詳細は本号記事"メンドサの或る日"に一

ブラジルでの事実、
ＵＦＯはまだ出る

バレイアに出現した怪人

ウルヴィオ・Ｂ・アレイショ

〈アレイショ博士はブラジル、ミナスジェライス州の州都ベロリゾンテにある未確認空中物体調査センターの会長である。〉

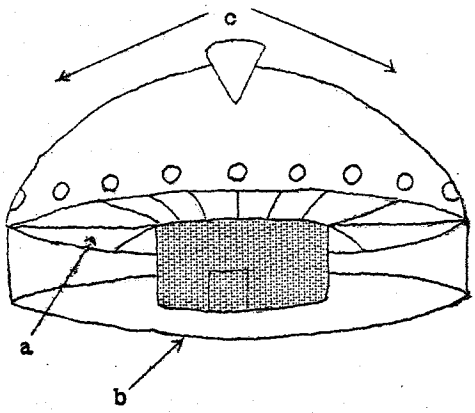
一九六七年九月十四日正午十二時頃に、ベロリゾンテの警察本部へ行けという電話があった。行ってみると公安委員ダヴィッド・アザン博士が若い学生のファビオ・ジョセ・ディニズをわれわれの前につれてきた。彼はきわめて感情的な反応を示しながら、典型的なショックまたは恐怖の様子をあらわして、約一時間前に発生した事件を説明しようとしていた。彼から一応の説明を聞いたあと、本人の興奮状態が少し静まったとき、本人と一緒に警察の車に乗ってバレイア病院付属のフットボール競技場へ行った。すでに教えられていたことだが、そこが事件の発生の場所なのである。

本人の説明

ファビオ・Ｊ・ディニズ（十六才）の言によれば次のとおりである。彼は九月十四日火曜日のおよそ午前十時三十分頃バレイア病院付近の〝バレイア〟バス路線の終点に着き、そこから病院の最端建物にむかって徒歩で前進した。そこで金属製の窓シャッターを売ろうと思っていたのである。

二列のポプラ並木にはさまれたアスファルトの小道を静かに歩いて、くだんの建物に着く途中にあるフットボール場の反対側へ来た。そのとき競技場のまんなかに、ざっとキノコ型の奇妙な一個の物体が存在しているのに注意を引かれたのである。珍しそうに彼は近寄って行った。志願兵徴募週間と関係のある何かの試みだと思ったのだ。すると突然、かすかなぼんやりした物音と共に丸屋根の外周からガラス製らしき透明なスクリーンが地面に降りてきた。このスクリーンを透してむこう側に一種の円筒形のものが見えたが、これが球状のドーム型丸屋根の土台となった。何とも説明のしようのないやり方で円筒中に、底部から上にむかって

a＝ドームの平たい底部から出る赤黄青の断続的な光
b＝黒い中央円筒の周囲を動くガラスのカーテン。円筒に出入口があるのが見える。
c＝ドームの径：２０m

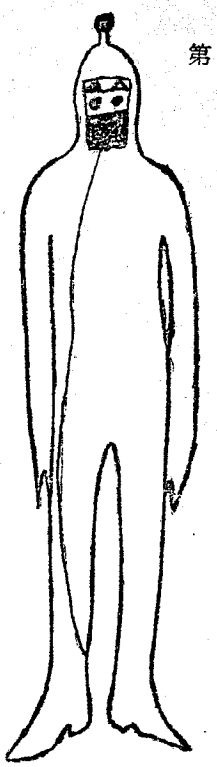


第１図

ゆっくりと穴が開いてくるのが見えた。それを通り抜けて二人の奇妙な人間が並んで現われた。その瞬間ファビオはあとずさりしたが、次の声が彼を元へもどしたという。

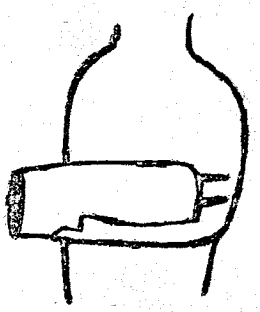
「逃げるな！　元へもどれ！」

相手から約五メートルの所で奇妙な人間と直面しながら、その一人が円筒の周囲をぐるりと一周するのを見たが、他の一人が完全なポルトガル語でファビオに言った。「明日ここへ来い。来なければおまえの家族をつれて行く」



第 2 図

先の一人が一周し終わって発言した人間と一緒になったので、ファビオはそれもながめることができたが、その男は右腕に一個の器具を持っているのがわかった（第3図）。それは武器のようにファビオに向けられていた。すると発言した男がドアーの方へ向きなおり、仲間に円筒中へついて来いと合図した。二人がドアーの暗黒中に消えるとドアーはしまり、透明のカーテンがもと降りた場合と同じキイキイという音をたてて元の場所へ上がっていった。アラポンガ（ハサミとぎ）という名で知られているブラジルの小さな茶色の鳥の鳴き声に似たその物音は完全にやんだ。すると物体はゆるやかな無音の垂直運動を始めた。恐れてファビオが逃げだしながらそれをチラリと見たら、最初ふり向いたときは傾いたままなおもゆっくりと飛んでいたが、二度目にふり向いたとき物体はすでに消えていた。



第 3 図

怪人の容姿

怪人たちは身長二メートルから二メートル十センチで（第2図）人間の形をし、人間の体つきをして、頑丈な体格であったという。頭から足までダイヴァーの服に似た緑色のピッタリした服を着ていたが、見えた部分は緑色の皮膚の顔のところだけで、二つの大きな丸い目が左右大きく離れてついていて、白眼の部分は見えない。濃い三角形のマユがあった。口と鼻孔は見えないが、これはヘルメットの前部に黒い物が横に張ってあって、それが鼻や口を覆っていたからだ。

この〝覆い〟の底から胸にたれさがったチューブがあり、右足のカカトまで続いて背中へまわり、首のウナジへとどいている。カカトは奇妙な工合にふくらんで、両手の各指はからだと同様に服で包まれていたけれど、太くて指の数が四本のようだった。ファビオが気づいた二人の人間のあいだの唯一の相違は、発言した男でリーダーとおぼしき者の頭から突き出ているアンテナと、他の一人が持っていた〝武器〟であった。

ファビオは怪人たちの動作がゆったりとしているのに注目した。長く速い大またの歩行、地面から非常に高くもち上げる足。カカトの底には一種の〝鉄のカカト〟を付けているように思われた。歩くにつれて草地を平らにしたのだ。

物体に関しては四つの部分から成っていた。すなわち(1)球状の丸屋根と(2)茶色の(3)丸窓に似た一列の穴のある(4)直径二十メートルの球型のドームである。丸窓(複数)の付いたこのドーム型の丸屋根は離陸の瞬間に回転しているように思われた。丸屋根の平らな基部には赤、黄、青の輝く光線があって、それらが断続的に光っていた。物体の円筒の部分は黒くて光っていて、巾が三メートル以上で高さが二メートルを越えるほどだった。その巾のちょうどまん中にあるのはドアーで、ドアーの奥には何も見えない。〝ガラスのカーテン〟のように見えた物は全く透明で、わん曲しているにもかかわらず反射はしなかった。丸屋根の最上端中央部に、ファビオの方を指しながら、水平な三角形の突出物があり、それはドームが回転しているあいだ静止していた。

ファビオの断言によれば、物体が離陸した後に彼はバス停へ走って行き、家へ帰って恐怖の事件を母に語ろうと思ったが、バスに乗ってから母の健康状態を考えて警察へ行くことにきめて、事件発生後約四十五分してから警察署へ行った。

ざっと以上が少年の陳述である。このテープ録音による説明は第二次的細部に関する詳細を提供するだろう。

根本的仮説

調査を行なった上で種々の説からとられた憶測は、順当にいって最も単純な根本的仮説である。つまりこの事件は経験上の観察かまたは論理的な推理に最も矛盾しない物事である。まず少年の物語に対する右の最も単純な解釈はわれわれには主観的なように思われた。この分野においては二つの可能性が調査されねばならない。すなわち〝意識的〟な空想の可能性であり、それはこの場合にはインチキやトリックと同じである。さもなくばそれは錯覚または幻覚の過程を含む〝無意識な空想〟で、錯覚とするならば率直にいえば精神病の気味がある。

主観的な憶測を排除または軽視することになれば、必然的に残りの憶測が優勢となる。つまりこの事件は客観的真実を有していたという憶測である。

一、資料の蒐集

(A)現場の調査と土地の状況

資料の蒐集はわれわれが警察にいたあいだにこちらの最初の尋問によってただちに始まったが、それは現場へ行ってからも続い

いた。その場で、公安委員のダヴィッド・アザン博士とその助手たち、車の運転手やわれわれの面前で、その学生は現場の状況を再度説明し、しかもまたもや激しい感情的反応を示したが、二人の怪人がUFOから出て来る部分の説明をするときは特に感情的になるのだった。

乾いた地面や枯れきった草地で証拠を求めて探しまわったわれわれは、二つの小さなへこみを見つけたが、それは円形の弧状で、互いにかなりの距離をへだててついている跡だった。その一つの近くに大きなクツのカカトに似た形のへこみがあった。ファビオの考えによれば怪人の一人の足跡ではないかという。だがこの足跡の性質はその可能性を確証できるようなしろものではなかった。

現場検証を行なっているあいだ終始近くの道路や大きな病院の窓々をも含めてあたり一帯は全く人通りが絶えていた。

バレイア病院はベロリゾンテ（ミナスジェライス州の州都）の東方のバイルロ・デ・サウダデ（思い出の地）として知られる郊外に位置する。そこはセルラ・ド・クルラル（家畜の山脈）という名の山並の山腹にあるさびしい丘陵地であり、病院は平たい台地に並んだ一群のバラック建築物から成っている。小児結核患者用の一病棟は主病棟群より約九百メートル離れた南側の場所に孤立している。問題の病棟へ行くには繁茂した樹木が両側に植えてある大通りを行けばよい。その建物の前にそのポプラ並木の右手にフットボール運動場がある。あたりの地平線は山々と樹木から成っている。

(3)翌日の実地検証

翌日の午前十時に五名のメンバーと三名のオブザーヴァーから成る未確認空中物体調査センターの一団は、くだんの少年と共にフットボール運動場へ行った。そこで二名の民間警察警官と二名の憲兵の面前で新たに詳細をきわめた実地検証が行なわれ、その場面は映画や写真に撮影された。

現場の磁気に関して何かの手がかりを得ようとしてコンパスが用いられたが針は変化を示さなかった。ガイガーカウンターがなかったために放射能を測定することは不可能だった。

見たところ焦げた粒状の少量の物質がフットボール運動場のセンターライン近くで集められた。

病院の尼や職員が提供した情報によって、付近一帯のだれも少年の言う時刻に異常な物を認めた人がいないことがわかった。一方、問題の時刻には建物内の子供たち、従業員、守衛のすべては朝食か仕事のために屋内に集中していたことが明らかになった。

二、資料の調査

少年が報告してから二日後にこの事件は新聞社の注意を引き始めた。われわれの調査の一つの重要な目的は、現代にせよ過去にせよ一連のUFO目撃事件の系列の中にできればこの事件を位置づけようとすることにあった。それが単独の事件かどうかを確証するためで、もしその反対ならば何かの相互関係を発見するためである。

まず第一に、このバレイア事件と同じ頃に起こっている事件類

に関する証拠書類調べの結果わかっている出来事をあげてみよう。

A. 同じ頃の事件

(1)隣接地域の事件　バレイア事件の日付（一九六七年九月十四日）を参考としてとりあげれば、証拠書類の調査によって地理的に隣接した地域と遠方の地域の両方に、同じ頃一連の事件があったことがわかる。ファビオが物語を語ってから二日後の九月十六日の夕方、黒色の輪郭のはっきりした円形UFOが中心を軸にして回転し、螺旋形コースを移動しているのが見られた。目撃者（複数）はベロリゾンテの異なる二個所にいたが、互いに未知であり、交際したこともなかった。

九月二十四日午前十一時二十分、ミナスジェライス州イタジュバ上空を浮かんでいた三個の輝く光点の一つが、全体の形がキノコ型で〝下部に付属物のついた丸天井〟の形になった。この付属物は地上に接近するにつれて（二千メートルまで）大きくなり、物体が上昇すると再び内部に引込むように見えた。そしてやがて平たい円盤形になってしまった。

八月三日にはリオデジャネイロ州で弁護士の車がUFOに追跡されたが、底部の突起物をバレイアUFOのドーム型キャビンの内部に引込んだ円筒形の末端とすれば、この記述はバレイア事件とぴったり合う（第4図）。しかもこの記述はファビオが体験を語ったあとでリオデジャネイロの雑誌ウ・クルゼイロの数頁に掲載されたことは注目されてよい。

一九六七年六月七日の早朝、一個のUFOがイタジュバ付近の自動車に接近して故障を起こさせた。明るく輝く物体の透明な表面をすかして奇妙な人間の顔（複数）が見られた。運転手がGEOANI（未確認空中物体研究グループ）に語った話によれば、全体の形がキノコ型であったという。

第 4 図

一方第5図が示すように下部の突起物はこの場合四辺形であった。

八月十五、十七、十八日にはUFO（複数）がベロリゾンテ付近に観測された。八月十五日の事件はBR－一三五号路のそばに着陸したといわれている。八月十八日の目撃は白昼のことで、地上約三百メートルの高度のUFOに関する事件で、右と同じハイウェイの近くであった。

一九六七年十月にもベロリゾンテとその近くにも著しい事件（複数）があった。この事件の一つは、その日早朝市の中心部の屋根をかすめて飛んだ一個のUFOに関するものである。その体験で眠りから覚めた目撃者の一人は、UFOが頭上を通過するあいだ奇妙な精神生理学的影響を受けた。

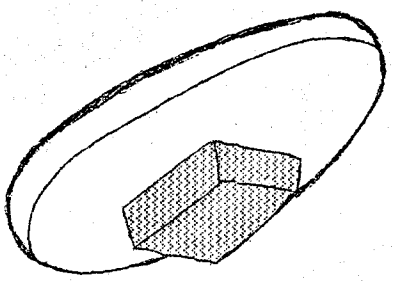
これらの事件の大部分は－ここに引用しなかった他のケースも同様に－秘密にされたままになっている。つまり公表されていないのだ。

バレイア事件の一日後に米国コロラド州アラモサ村で一頭の馬が空飛ぶ円盤に打たれて死んだという報告が出た。一部分肉がはがれてしまったこの馬の死体には骨が現われていたが、火傷の跡はなく、或る場所で発見されたけれども、そこは他の種々の痕跡や出来事によってUFOが着陸したのかもしれないといわれている場所だった。その位置の性質からしてこの事件は特にコロラド大学のコンドン計画委員会による調査用に適している。

B. 時と場所の遠い事件

記録文献の調査に基づいて過去にさかのぼると、バレイア事件と遠隔地に起こった次の四つの事件とに基本的な一致点があることがわかった。

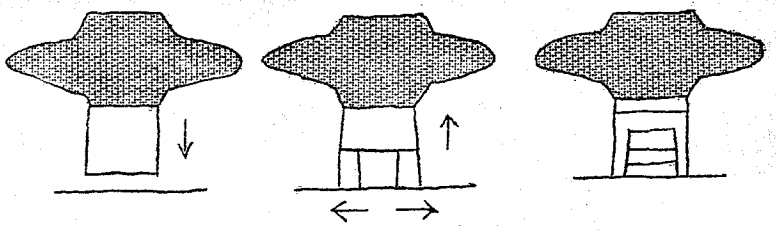
〈サンカシアーノ事件〉　一九六二年四月十日に発生したまず最初のものは、イタリア、フローレンス付近のサンカシアーノに住む二十六才の既婚洋服屋マリオ・ズッカラが目撃者として登場する。夜間、人気のない道路を家にむかいながら本人は一陣の風に吹きつけられた感じがしてUFOを見た。それは径八・五メートルで、灰色、二枚の皿をはり合わせたような形だった。その物体は（第6図）は彼の近くの地上二・五メートルの高さの所に止まった。するとその下部から巾一・五メートルの円筒が現われて、やがて地面にとどいた。目撃者の印象は次のとおり。それが地面にとどいたとき、その円筒形外管が再び物体の中へ入っていって、あとに内管が残り、その中でドアーが下から上にゆっくり開いた。



第 5 図

(2) 遠隔地の最近の事件　アルジェンティン共和国のロサリオ付近のヴィリャコンスティトゥシオンで一九六七年九月十一日に発生した事件とバレイア事件との類似点を調べるのは価値がある。バレイア事件から二日後にブラジルの新聞が、ヴィリャコンスティトゥシオンにおけるUFOによる夜間着陸事件の記事を載せた。その翌日着陸現場へ近づいた観察者たちは、石炭に似た物の残りが地面にあるのを発見した。その報告は「これらはいやなニオイのする物の粒であった」と続けている。ヴィリャコンスティトゥシオン物質のこの一般的記述はバレイアのフットボール運動場で発見された残り物の記述と驚くほど一致している。

われわれはロサリオのUFO観測グループに対して、比較用として分析の結果を見せてくれるように頼んだ。この結果は本記事の第二部に掲げてある。



第 6 図

この出口から二人の人間が出てきた。身長は一・五メートル、人間の形をしていて、全身は一種の輝く金属の衣服で覆われていた。二人の頭上には二本の垂直なアンテナがある。怪人たちは全体明るく照明されたからっぽの構内へ目撃者をていねいに招き入れた。すると本人は二人の怪人からでなく、物体の中心部から来る声を聴いた。それは拡声機で増巾される声に似ていて、広い空間に響いているかのようだった。その声はイタリア語でしゃべったが、目撃者によれば内容は次のとおりである。「第四の月において、われわれは人類宛のメッセージをあなたに伝えるために朝一時にやって来よう。あなたが見た物の真実性を確信させるために別な人にもこの予告を与えるつもりだ」この物体は地上に何の痕跡も残さなかった。

〈カターニャ事件〉

この事件はイタリア、カターニャ市のコルソプロヴィンチェ一四六に住む国家公務員エウジェニーオ・シラグーサ（四三才、妻帯者）に関係がある。それは二つのコンタクト事件を含み、両方とも夜間に発生したもので、ドメニカ・デル・コルリエーレ紙のレナート・アルバネーセ記者によって調査された。数度彼の家の上空を通過する円盤を目撃した後、シラグーサは自分で〝心の探り針〟といっているものによって、二度の機会に不思議な人間たちとのコンタクトに入ったのである。

一九六二年四月三十日の夜、彼はエトナ山の山腹で二人の人間に会ったという。相手は身長一・六五メートル、人間の形をし、金属的な生地の上下続きの潜水服を着て、断続的な黄・緑・青の光を放つベルトをしめていた。彼の話によれば、わずか一・五メートルの距離で相手の一人が地球上の権力者たち宛に平和を呼びかけるメッセージをイタリア語で伝えた。その声は人間らしからぬもので、録音テープの再生音のようであり、金属的な調子を帯びていた。或る大穴のフチまで来て彼は次に径約十五メートルの物体を見たが、その形は物体から発するまぶしい光のために不明瞭だった。

一九六二年九月五日の夜間、モンテマンフレ付近で第二回目の会見が行なわれたと彼は主張する。彼から近距離の所に二人の人間が現われたが、それらの身長は二・一五メートルくらいであった。腰のベルトから発する光のために相手の顔は見えない。二人とも前回の人間たちと同じような服を着ている。このときもイタリア語でメッセージが口述された。物体は巾二十五メートルの巨大な回転ゴマで、空中に浮かんでいた。「下部から三メートル以

上もの金属の円筒がほとんど道路に触れるほど降りて来たが、小さなドアーがついていて、一種の昇降機のようだった」とシラグーサはいっている。

〈パハスブランカス事件〉

一九五七年四月、一人のオートバイ乗りがアルジェンティン、ロサリオ付近のパハスブランカスにある国際空港から十五キロばかりの道路上を走っていたとき、径二十メートル、厚さ五メートルの一個の円盤が地上十五メートルの空間に停止しているのを認めた。オートバイの電気系統がだめになったので、彼は路傍のミゾの中に隠れた。円盤が二・三メートルの高さまで下降すると、その下部から一種の昇降機が現われて、ほとんど地面にとどくほど降りてきた。すると内部に身長一メートル七十センチの一人の男がいて、近づいてから目撃者を隠れ場所からおだやかに引き出し、友好的態度で頭をなでて気分を静めさせた。怪人の服は潜水服のようで、からだにぴったりしている。プラスティックでできているようだった。怪人と一緒に円盤内に入ったオートバイ乗りは、そこに同じような服を着た五、六名の人々がいて機械装置の操作盤の前にすわっているのを見た。異常な光がキャビン内に満ちていて、奇妙なことに目撃者が外部からは見ることのできなかった一連の四角な窓が並んでいた。やがてオートバイ乗りは再び外部へつれ出されてオートバイの所まで帰った。相手は別れの身振りを示すかのように彼の肩に手を置いてから、再度昇降機の中へ入った。するとそれは急速に円盤内に引込んでしまった。

〈リオパルド事件〉

一九五九年六月の或る夜、マトグロッソ州（ブラジル）のリオパルド河でワニ狩りをやっていたサンパウロの三名の市民が、一個の輝く物体が接近してきて一同から百メートルの距離の所に停止するのを見た。それは径六十メートルで、金属的な表面を見せていた。ゆっくりと円スイ形の物が下面の中心から突き出て四十メートルの長さに伸び、樹木の頂上から五メートルの所まで降りて来た。研究家ルッペルト・キーナーの描いたスケッチは、いくぶん円筒形としての突出物を示しており、UFO全体の形をキノコ型に描いている。

Γ. 近隣地区における過去の事件

ベロリゾンテ地区におけるUFOの近接または着陸の報告の頻度は高まりつつある。未確認空中物体調査センターは一九六三年以来ベロリゾンテの都市部における四件の自称着陸事件を記録することができた。バレイア事件と同じもののように思われる唯一の事件は、サグラダ一家のそれで、〝ベロリゾンテの一つ目男〟なるこの事件はすでに特殊報告の主題となっている。目撃者たちの話によればこの事件は身長二メートルを越す四名の怪人の出現だといい、その一人は或る家の庭を歩いていた。三名の子供たちはこの巨人連が頭の中心にそれぞれただ一つの丸い目を持っていて、白目の部分がなかったと述べている。

バレイアの怪人が再度出現？

ニジェル・リメス

ブラジル空軍とブラジルの権威筋は、一九六八年中にパウルーとリンス（サンパウロ州）地方に発生した多数の着陸事件に関して、よくある沈黙のカーテンをおろしてしまったという確実な形跡がある。調査は困難であり、更にもっと困難化するだろうから、きわめて慎重に処置することが必要なのだ。

ところで私ならバレイアで目撃された背の高い人々が再び出現したと思われる驚くべき事件の予備的な大要を以下に述べることができる。（注＝本号前掲記事を参照）

私が個人的にインタヴューして徹底的に質問した、ただ一人だけ知られている目撃者は、年令二十一、二才くらいの若いブラジル女性で、背の高い体格のよい田舎娘、サンパウロ州の或る町の出身者である。私は本人の氏名と住所に関する詳細をFSR誌へ知らせたが、だれにもわかる理由により目下はこれを伏せておく必要がある。

その若い女性はたまたま新聞で最近サンパウロで開かれた〝空飛ぶ円盤討論会〟に関する記事を読んだという。そこで彼女は重大問題だと思っている自分の物語をブラジル・ヘラルド紙の本社へ行って話す気になった。彼女が同社の専務取締役ウィリ・ウィルツ氏に話していたところへ偶然に私が事務所へ現われて尋問に加わることができたという次第である。

われわれは目撃者の態度が率直で素朴であることがわかった。彼女はすてきな印象を与えたのだ。彼女が明らかにしたのは、広く世間に知られたくないこと、知らせることが義務であり、この事件が重大にちがいないと感じたために申し出たにすぎないことなどである。彼女は何を目撃したかをよく心得ているようで、また目撃した物はたぶんもっとありふれた別な物かもしれないと私がほのめかしても、全然動揺する気配はインタヴュー中に見られなかった。

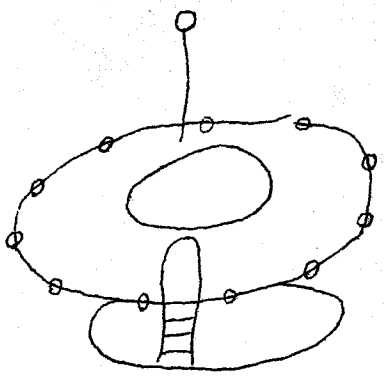
彼女の物語

話は次のとおりだ。一九六八年十一月二十一日の夕方、彼女はグァルロスとヴィラバルロス（いずれもサンパウロ州にある）両町間の環状グァルロス路線のドゥートラ道を走る田舎バスに乗っていた。

午後九時三十分にバスはマセド付近の田舎停留所で停車した。ここで少憩するのが運転手の習慣である。この日のように予定時刻より早目に着いたと思われる場合は特にそうするのだ。

その地点には街燈はないが、夏季なのでまだかなり明るかった。道路の左手に一帯の荒地があり、彼女がバスから約四十メートルとみた距離の所に、立っているのか地面に近い空間に停止しているのか、アエロウィリイス車の大きさの輝く金属の物体があった。（つまり英国製ジャガー四ドアーサルーン車の大きさくらい）。第1図はわれわれの面前で目撃者が画いた物体の最初のスケッチ

である。



第 1 図

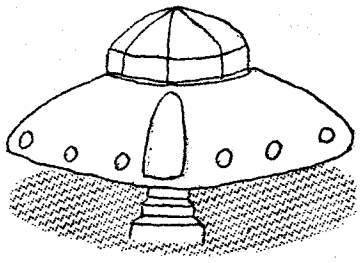
そこで比較するために種々の円盤図を見せたところ、彼女は自分が見た物に似ているものとしてボトゥカトゥUFOを即座に選んだ。ただし或る明確な相違を指摘したけれども—。たとえば彼女は自分が見た物体は三脚の着陸装置を持たず、三段から成るハシゴが付属していたと確言した。

さて彼女は大ざっぱに類似しているものとしてボトゥカトゥ型円盤を選んだので、第2図に示されるような輪郭を描き、種々の細部すべてを彼女に描き込んでもらった。アンテナ、ドーム、ドームを形成する面の数（四面だと彼女は思った）、フチ等である。

目撃者がきわめて強く感じたのは、円形の変化光（複数）が並んだフチは右廻りに廻っていたということである。しかも終始開いたドアーと地面に垂れた三段のハシゴが見えたし、ドアー自体は動かなかったという。

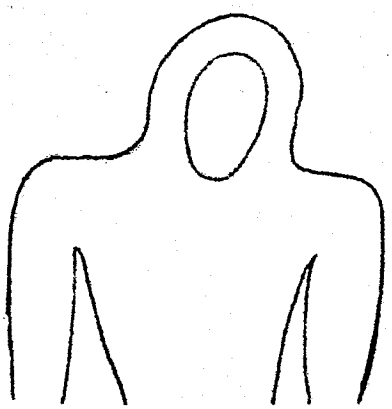
私個人の印象によれば、これについて考えられることは、絶えず変化する一列に並んだ丸い色光のために旋回運動が起こっているという誤った考えが彼女に浮かんだのかもしれないということである。それとも物体の型がもっと異なっていたのではないかとも思う。

つまりこの場合は色光群はドアー面よりも低い面にあり、実際には色光群と外縁の低い面が旋回する一方、ドアーを含む外縁の上部は静止していたのかもしれない。こちらから暗示を与えることなしにいずれ彼女がこのことを確証してくれることを願っている。



第 2 図

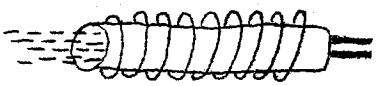
さてここで彼女の話のなかで最も驚くべき部分に入る。というのは着陸したUFOの前に身長約二メートルの怪人が立っていたというのだ。「三人ともからだにぴったりした光る黒い服と同じく光る黒い長グツを着用していました」（第3図）



第 3 図

それらの一人は片腕の下に一種のチューブをかかえていた。彼女の見るところではそのチューブは長さ約六十センチ、直径約七センチだった。この胴（武器か？）のまわりには螺旋形の光るアルミニウムのような別なチューブがついていた。更に目撃者が確信するところによれば、第4図に見られるようにチューブの後端に二本の細い突出物があったという。

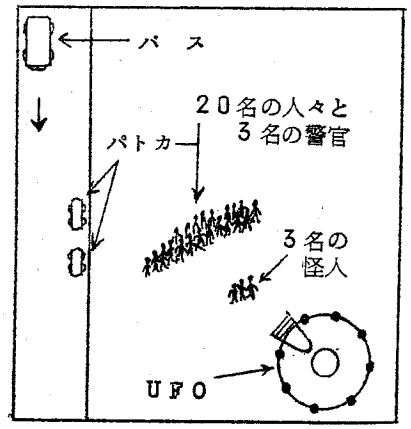
彼女と怪人たちとのあいだの、バスから二十メートルばかりのところに、彼女の方へ背を向けて三人のブラジル人警官とその背後に約二十名ばかりのブラジル人がいたというが、その全員が怪人と直面していた。そして道路上、バスの前方に、二台の警察無線パトロールカーが停止していた。（第5図）



第 4 図

警官たちは手に拳銃を持っていた。ちょっとのあいだ二つのグループは向かい合ったまま立っていたが、突然UFO怪人の一人の腕にかかえていたチューブから炎のような銀色の強烈な集中光線を放射した。光線が警官と見物人たちの一団に向けられると、その前列にいた人々（警官を含む）が完全に動きを止められ、マヒしてしまった。しかし前列にいなかった他の多くの人々も影響を受けたことが彼女にわかったし、数名は失神したかのように倒れるのが見えた。また特に気づいたのは、怪人はチューブを振らないで、腕の下にチューブをかかえたまま全身をぐるりと動かした。

三名のUFO怪人は終始きわめて冷静に見えたが、やがて物体の方へゆ



第 5 図

っくりと歩いて行って、ドアーから中へ入った。すると物体は離陸して急速に上昇し、雲の中に消えていった。目撃者はこの事件が約十五分間続いたとみている。

以上が驚くべきエピソードであったと思われる事件の予備報告である。もしこれが目撃者がいう時間（十五分）ほど続いたとし、バスの中に他の乗客（複数）がいたのならば、多数の見物人と三名の警官以外に更にかなりの数の目撃者がいなければならないことになる。ところが全く困ったことに、われわれはこれまでにだれからも何も聞いていないのだ。一方この際注目すべき重要なことは、この若い女性の物語には全然確証がないのではないということである。というのは実は十一月二十二日付の新聞にこの事件の短信が載って、それがFSR誌に送られているからだ。

バレイア事件との比較

バレイアの着陸事件の内容とそのときの怪人及び現場で見られたチューブのスケッチ等を示されて、彼女は即座にそれを認めて、自分が見た怪人や〝武器〟と同じものだと主張した（彼女が自分の体験のすべてを語った後にバレイア事件を知らされたことを強調する必要はないと思う）。

彼女が確信することが二つある。一つは目撃された三名の怪人は頭上にアンテナをつけていなかったこと。だがここで指摘されねばならぬのは、バレイア事件の目撃者ファビオ・ジョセ・ディニスが、怪人中の一人だけが棒状の器具を持っていたヤツでなく—ヘルメットの頂上にアンテナを付けていたと全く明確に述べていた点で、ウルヴィオ・ブラント・アレイショ博士の記事のゴードン・クレイトンによる訳文中でも強調されている。またバレイアで見られた怪人たちのその一人が頭上にアンテナをつけていなかったからといって、わが女性目撃者の物語がバレイア事件の内容と相違するとはいえない。

次に彼女が極力主張するのは、自分が見たUFOはバレイアで見たといわれる物の路画とは〝全く違う〟ということだ。一方—三脚型着陸装置のかわりに三段のハシゴがあった件は別として—彼女は自分が見た物体とボトゥカトゥで少年たちが見たといわれる物とは同じだと強く思いたがっていた。

仮定的結論

わが若き淑女は全くまじめな正直な人であるように見えた。話しているあいだ動揺したことはない。ただしすでに述べたように、円盤の外縁とそこに並んだ変化色光とが回転していたかどうかの一点だけには本人も疑惑も感じている。（いずれにせよそれが右廻りに廻っていたという考えをわれわれが無意識に彼女に〝注ぎ込んだ〟とはいえないと思う。そのようなことはたしかにわれわれが聞きたかったことではない。われわれの持論はかかるUFOの回転（機体の一部の回転）は常に左廻りだという考え方に傾いているからである）

英国の如き小さな国の懐疑的な人々のなかには、人里離れた田舎の一地点でバスが十五分間も停車するのを変だと思う人があるかもしれないが（チャールズ・ボウエン注＝べつに驚くことはな

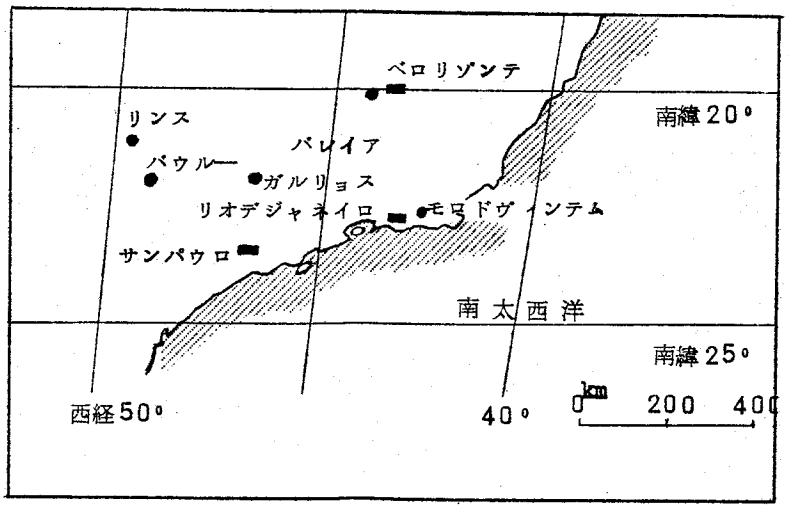
い。英国の公共輸送機関、特に南部の列車は都会地でさえもしばしば長時間不可解な停車をする！）、確言できるのは、米国や特にブラジルのように広い国土を長時間のバス旅行をした人ならば、運転手や乗客にとってこのような〝息抜きの停車〟は普通のことであることがわかるだろう。しかも目撃者が説明するように、事件が発生した場所は実際にこの走程の中間点である。

もしこの目撃者がバレイアの怪人や物体、ボトゥカトゥのUFOなどのスケッチ類をすでに見たことがあって、その後に物語をでっちあげることにしたのだという人があれば、次のように尋ねさえすればよい。「そのスケッチ類を本人はどこで見ることができたのか？」と。これらのスケッチはウルヴィオ・ブラント・アレイショ教授の自家版謄写刷り会報とFSR誌に載っただけで、われわれの知る限りブラジルの出版物に出たことはない。しかも本人がそのスケッチ類を見た上で、それに基づいてインチキ物語をでっちあげたとすれば、三名の怪人が各自の頭上にアンテナをつけていたということと、ボトゥカトゥの着陸事件に関する私の記事に付けたスケッチ類に示されるように物体が三本脚を持っていたということをなぜ彼女が主張しなかったか？

これまでのわれわれの結論は次のとおりである。この事件はたしかに真実であるようで、軍の権威者が他の目撃者が名乗り出るのを封じてしまったのだ。

われわれは今後も調査を続けるつもりだが、その詳細は当座伏せておくほうが賢明だろう。目撃者にもたびたび会う予定でおり、本人のいう発生場所へ本人と共に行くつもりでいる。いうまでもなく、三人のブラジル人警官を含むあの多勢の目撃者たちやその居住地をつきとめるように慎重な努力を重ねるつもりでもある。

ブラジル南部地図



ノースキャロライナ州の

〝小人〟撮影事件

ジョン・A・キール

いわゆるUFO写真と称せられるものについては綿密な調査を必要とするが、〝円盤乗員の写真〟と称せられるものも検査をしてはならないという理由はない。この種の最初のものとしてこの写真はべつに真偽の判決をくだそうというつもりはなくただの記録用として掲載されたものである。

ニューヨークのデル出版社が〝円盤UFO報告〟誌を廃刊することにきめてまもなく、編集長カーメナ・フリーマン女史は郵便物に同封された非常に興味ある一枚のカラー写真を受け取った。それはジョウゴ型の物を手に持った小さな人物の密着印画で、白い球体の前に立っていた。添書は十四才の少年が書いたもので、著しく簡単な内容であった。ただ一個の球体がノースキャロライナ州の自宅のうしろに着陸したことと、それから出てきた一人の小さな人間を撮影したとだけ述べてあった。フリーマン女史がその手紙と写真を私へ回送したので、私はその少年と長期間の文通を始めたのである。

少年は手紙の返事をくれるのがおそろしくおそかった。二人は一九六八年のほとんどを通じて手紙を交換し続けた。私は長い質問書を送って、少年の物語を確かめるために作成した多くの巧みな質問を発した。また両親、学校の教員連、土地の4Hクラブの成年者リーダーなどから公証人証明の宣誓書をもらった。いずれもその写真を見たこと、少年の物語が真実であると信ずることなどを証言したものである。

彼の家族は落胆させるような要求をしてきた。つまり家族は広く知られることを心配して住所を公表しないでくれと頼んできたのだ。家族はノースキャロライナ州のきわめて小さな町に住んでいるので、その町の名を洩らせば家族の要求を無視することになる（だが住所は記録してあるので、責任感の強い研究家には知らせてもよい）。ただその町はノースキャロライナ州パムリコ郡の広大な沼沢地の端にあるとだけいっておく。

撮影者のロニー・ヒルはかなり人並はずれた少年である。私と初めて文通を始めたときは十四才で、八年生クラスの級長であり、ボーイスカウトの副リーダーであった。正直な思慮深い勤勉な少年として評判がよかった。

元のカラー写真は全く鮮明で、私はそれをニューヨーク市の数名の写真専門家に見せた。われわれはそれを大画面に引き伸ばして寸法を測定し、精密に検査した。その結果、大きさと距離に関するロニーの見積りが正しいことが確証されている。サーガ誌の編集陣と美術担当者もその写真を注意深く検査して、われわれの判定の正しいことを確証した。

工合の悪いことだが、ネガを郵便で送れとロニーに頼むことは慎重さに欠けると感じたので、われわれはまだ見ていないが、それを見たオトナたちがいることを確かめている。

〝小人〟の出現に先立って空中に奇妙なニオイがしたことをロニーが特に言及している点を記す必要がある。この〝ガス〟要素

はこのような事件について少し知られた現象で、私がサーガ誌一九六八年七月号にUFO関係の〝ガス〟に関する記事を公表するまでは大体に無視されていた。ロニーは私の記事が掲載されるずっと以前にこのガス現象の説明をしている。

ロニー・ヒル少年が撮影した小人の写真。背後に白い球体が見える。

ロニーの物語

一九六七年七月二十一日金曜日の午後、ヒル少年は自宅のうしろの庭で働いていたが、そのとき事件と称されるものが発生した。以下は彼自身の言葉による説明である。

「ぼくはガスのようなニオイのする奇妙なニオイが空中にただようのに気づいた。そのために目から涙が出た。また物音にも気づいた・・・静かな音だった。いつもは鳥の鳴き声や犬のほえる声が聞こえる所だが、その日はそんなものは聞こえなかった。

約十五分後にブーンという音がしてガスのニオイも強くなった。そこでふり返ってみると、空中に奇妙な物が見えた。それは黒い帽子みたいだった。そのときぼくは離れて動く物をちらりと見た。それは径約九フィートの白球だった。みずから動き始めた・・・ぼくは地面に伏せた・・・あらゆる種類の物事が心の中を急速に通過した・・・ぼくが見た物をだれも信じてくれないだろう、何かの証拠をつかむ必要があると思って、カメラ（コダックのサビー六二〇）を取りに家へ走った。家の中へ入ったときぼくが見た物についてだれにも話さなかった。充分な時間がないのだ。現場へ引き返したとき物体（白球）が地上にいるのを見た。

約五秒後に大きな物音を聞いてそのため耳が痛くなった。ぼくはかたずをのんだ。身長約三・五フィートないし四フィートくらいの一人の小人が球体のうしろから出てきたからだ。右手にはジョウゴ型の黒い物を持っている。すると急にそれを地面近くにおろしてから腰まで持ち上げた。続いてからだの向きを変えて球体のうしろへ行った。再び大きな音がした。すると球体の下部から強い青色のゆらめく光が吹き出て球体はゆっくりと空中に離陸した。続いて大きな物体が再び現われた・・・球体は大きな物体の棒状の物につながって、大きな物体が球体を穴の中へ引っ張った。すると大きな物体はすさまじいスピードで出発し、樹木の頂上を越えて消えて行った」

これらのことが起こっているあいだ、ロニーはかすかなシューという音を聞いたが、それが物体から出てくるのか小人からくるのかはわからない。このシューという音は他の着陸事件でも報告

されているし、一八九七年の恐るべきキャプテン・フートンの例でも報告された。ロニーがいうには、小人は〝ゆっくりと、からだをぐらつかせながら〟動き、からだの向きを変えるとき両脚を堅くぶらんぶらんさせて自由がきかないように見えたという。

少年と小人間の距離は約十五フィートだった。公表された唯一のものであるこの写真は青味がかって、両端はカブっているためにいたんでいるが、これはロニーにとって有利である。なぜならこれと同じようなカブリ現象（フォギング）は他の真正と思われるUFO写真類にも現われているからだ（注＝カブリとは写真用語で、雲がかかったような不鮮明な状態を意味する）。このカブリは物体から放射する何かの放射線か化学放射線のためではないかといわれている。原画では小人は高い頬骨のついたふくらんだ肉づきのよい頬をしているように見え、ドイツ型みたいなヘルメットを着用している。ジョウゴ型の物が手の中に見える。小人のからだにぴったりした服は銀色で金属製であり、頭部は青緑色のように見えたとロニーはいう。両眼は傾いてつり上がっていた。銀色のヘルメットをかぶり、腰のまわりには濃い青色のベルトをしめていた。〝青いベルト〟は南米で数名の目撃者によって報告されている。

ロニーのいう〝大きな物音〟は世界中の着陸報告においてしばしば出てくる特徴である。私はこうした確かな詳細が少年の物語の確実性を高めていると感じる。注目すべきは、少年はその地域でトゥルー誌やサーガ誌などを入手できないことだ。本人はデル誌を一冊見たことがあるが、FSR誌の〝ザ・ヒューマノイズ（注＝FSR誌の出した円盤奇談集）〟の如き特別な刊行物を読んでいない限り、ああした細部を知っていたとは考えられない。

ここに掲載された写真（15頁の写真）は原画から作られた白黒ネガの引伸しであって、原画の細部の多くは失われている。

読者は一九六六年にオハイオ州ザネスヴィルで撮られたラルフ・ディター氏のUFO写真と称されるものが世界中の新聞雑誌に広く公開されたことを思い出すだろう。それは大雑誌などの表紙にさえ載せられた。しかしディター氏はそのために一ペニーも受け取らなかった。こうしたことにならないようにロニーの写真は本人の名で版権が保たれている。この写真を売って金をもうけた人はすべてロニー宛に直送されたい。われわれは興味を持つUFO研究家がわずかな料金でカラー原画を入手できるように目下手段を講じつつある。

レユニオン島のコンタクトによる
災難事件

ゴードン・クレイトン

きわめて重要な事件が、印度洋の英領モーリシャス島と仏領マダガスカル島のあいだにある仏領レユニオン島のラ・プレーヌ・デ・カーフル（カフラリア人の平原）という名で知られる平野で発生した。目撃の日時は一九六八年七月三十一日の午前九時である。

目撃者のリュス・フォンテーヌ氏は三十一才、農夫で家族持ち。妻は教員である。彼がまじめな勤勉な人で全く信用に価すると考えることにだれも異存はない。

以下は彼の話である。

「私はその朝アカシアの森の真中の小さな開拓地でキロメーター21（測標）の所にいて、かがみこんでウサギ用の草を取っていた。そのとき突然開拓地に一種の卵型物体を見た。私から二十五メートルの距離の所に地上から四、五メートルの高さの空間に浮かんでいるかのようだった。両端は濃青色で、中央部は明るくて、プジョー四〇四型車の風よけガラスよりももっと透明だ。物体の上下には輝く金属のガラスのように光る脚が二本ついている。

物体の中央にはこちらへ背を向けて二人の人間がいたが、左側の人間がくるりと向き直ってこちらへ顔を向けた。その人間は立っていたが、小さくて身長は約九十センチくらいで、顔から足の先までが電車の運転手が着る服のような一種の上下続きの服で包まれている。右側の人間はちょっと私の方へ顔を向けただけだが、それでも顔をチラリと見る余裕はあった。それは一種のヘルメットで部分的に覆われていた。

すると二人は私に背を向けた。熔接機の弧光のような強烈な閃光が起こった。周囲のすべての物が白くなった。高熱が放たれ、続いていわば一陣の疾風が起こると、数秒後にはもう何もなかった。

それから私は物体がいた地点へ接近したが何の跡もない。物体は直径四、五メートルで、頂上から底部までは約二、五メートルある。青色を帯びて、上部と下部は白かった。

私は一部始終を妻に語り、続いて憲兵にも話したが、みなただちに私の話を信じてくれた」

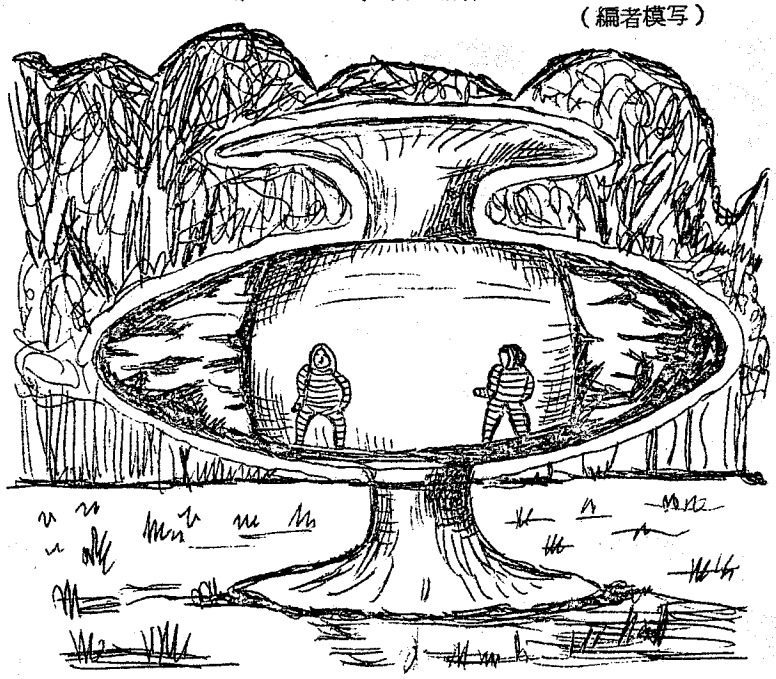
以上がフォンテーヌ氏の最初の証言である。翌日調査が始まった。そのとき彼は調査員たちにもっと正確に説明した。外観が卵型の物体に彼は顔を向けて直面したこと、アルミニウムのように輝いて上下が向き合っている二枚の白い皿のような物が見えたことなどである。

憲兵の調査はサンピエールのマルジャン隊長の手で行なわれ、市民保護係のルジュロ係長が放射能測定器を携行して現場へ行った。

驚異が待ち受けていた。彼らは疑似着陸の推定現場から五、六メートルの範囲内に或る程度の放射能を発見したし、また事件の日にフォンテーヌ氏が着ていた衣服にもそれを発見したのだ。

リュミエール・ダン・ラ・ニュイ（夜の光）誌の購読者で（注

リュス・フォンテーヌ氏が見た物体と人間のスケッチ
（編者模写）



‖この事件は最初同誌六八年十一月号に掲載された）。この事件の報告を親切にも送ってくれたレユニオン島の一通信者によれば、フォンテーヌ氏の衣類は物体に面していた部分のみが放射能を帯びていたと本人が洩らしたという。

ルジュロ係長によれば、草や小石等の八個所が放射能を帯びていることに彼らは注目した。そこでは六万分の一レントゲン線量を検出した。

危険な汚染という見地からすればこの数字は実際には極端に低い。救助者は二十五レントゲン線量に数秒間照射されることもあ、ることが認められている。百レントゲンまでなら有機体に対する損傷は不可避ではないが、二百では不可避となり、六百では致死線量となる。

だが調査者全員はこの放射能調査が、高地ばかりでなくこの熱帯地方にふる多量の雨が地面をすっかり洗い流してからの、十日後に行なわれたことを指摘してきた。ゆえに放射能レヴェルは調査の日よりもうんと高かったことだろう。

それはともかくとして、放射能を帯びた草や小石などは目下研究所にある。これらは疑惑の余地のない具体的な発見物である。

この記事中のスケッチはフォンテーヌ氏との合作で、ジュルナル・ド・リル・ド・ラ・レユニオン（レユニオン島新聞）の画家ジェラール・ピェドノワールによって現場で描かれた絵の転載である。その記事はクロード・ユク氏によって書かれた。

八月二十八日付の最初の報告を受け取ってから、われわれは右の新聞とそこにいる通信者とに連絡し、未知の放射線に照射された後の目撃者の運命に関するわれわれの関心を述べた。われわれはフランスのブラズイで起こった事件について述べて、市民保護係に知らせるように頼んだ。

レユニオン島と隣りのモーリシャス島では別な目撃事件（複数）が発生している。八月十一日に葉巻型物体がレユニオン島上空で見られたし、一方モ島のキュアーパイプでは六月に宇宙船らし

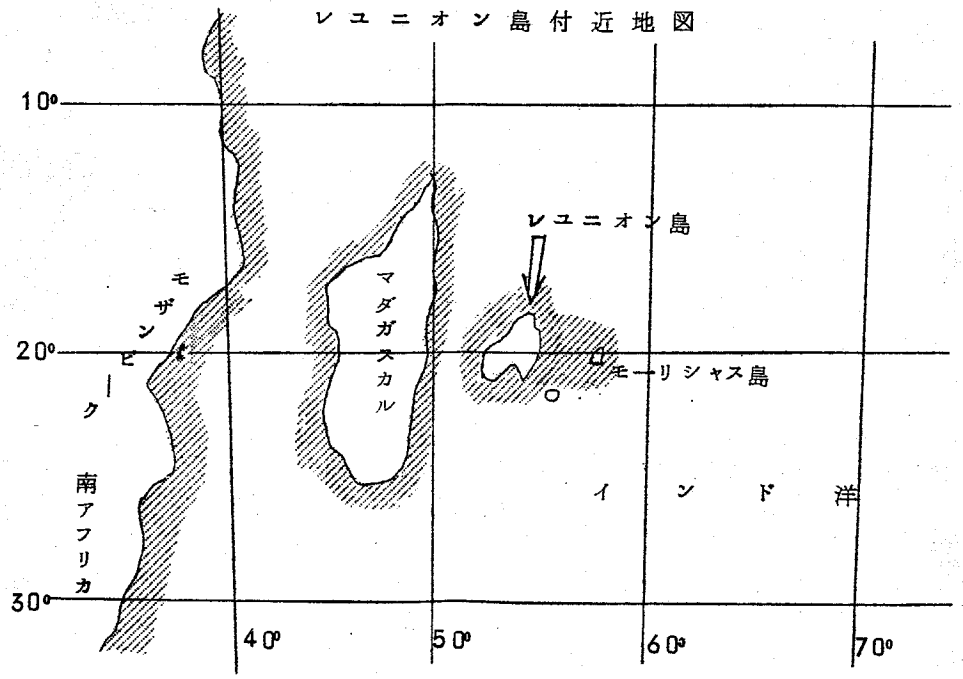
き物が飛ぶのが見られたが、それはフォンテーヌ氏の見た物に似ていたと伝えられている。

FSR誌編集者のあとがき

この事件の最初の大ざっぱな新聞記事の掲載以来、種々の噂が流れた。リュス・フォンテーヌ氏は放射能の犠牲者になったばかりでなく。その結果がひどかったので本人はパリへ空輸された上、そこのキューリー財団へ入れられたというのだ。リュミエール・ダン・ラ・ニュイ誌六八年十一月号の〝ストップ・プレス〟欄は、同誌のレユニオン通信員によればこれは事実あったことだと述べている。しかしエーメ・ミシェル（注＝FSR誌のフランス人スタッフ）は、同通信員の情報は目撃者が照射されたということだと私に（チャールズ・ボウエンに）忠告した上、ミシェルが行なっていた追跡調査の結果を待つあいだ極力用心せよと助言してきた。これはリュミエール・ダン・ラ・ニュイ誌の記事が掲載される前である。

われわれが今ミシェルから知ったのは、フォンテーヌ氏はパリへ空輸されなかったこと、キューリー財団へ入れられなかったことをミシェルの医師たる友人たちが知っていたことなどである。レユニオン島にいるミシェルの通信者がその後調査したところ、フォンテーヌの家族が調査者たちをまくことによって家庭の平和と静穏を得るためにウソの話をまき散らしたという。だがやはりリュス・フォンテーヌは放射能の照射から何らかの影響を受けたらしいが、それがどの程度のものかは噂のなかにほのめかされていない。

レユニオン島付近地図



メンドサの或る日

チャールズ・ボウエン

この記事は、十月四日付の手紙でアルジェンティンの友人から私宛に報告が来たとき、すでに準備された。その報告によれば次のとおりである。「例の娯楽場の二人の現金出納係はこの事件がインチキであることを公然と認めました。しかし（この主張の取消しについては）二通りの解釈があります。一つは、このインチキは彼ら二名に対して行なわれた。他の一つは、この二名は取消を迫られたということです。両名が主張を撤回したのは、そうしないと職を失う恐れがあるからだという人々もいます」

このささいな一八〇度転向はこの異常な物語を高く価値あらしめている。しかも私はこれを注意深く調査する必要があると思う。特に今やメンドサ地区でUFO事件を報告する者は刑事犯としてあげられるという次のようなきびしい告知を考えにおいて―。それで、この序文は別として私はこの記事を原文のままで出した。

空飛ぶ円盤〝禁止される〟

一九六八年九月七日付英字紙ブエノスアイレス・ヘラルドから―「メンドサ地区の警察は空飛ぶ円盤の出現に関して高まる関心を抑制するために乗り出した。実際には円盤自体を非合法化することは不可能なので、権威筋は円盤の噂をまき散らす者は法に従って処罰される」

コミュニケは次のようにつけ加えている。「刑法は不当な恐怖をまき散らすことにふける者に対する刑期を規定し、この規定を破る者に法の行使が適用される」

メンドサはアルジェンティン共和国とチリー共和国間の自然の境界をなす雄大なアンデスの壁によりかかって高く盛り上がった荒涼たる小丘のあいだに存在する。アルジェンティンのほとんどの町と同様に、その町もUFO報告が時折突発するのを特徴とする。一九六八年九月五日付ヘンテ・イ・ラ・アクトゥアリダード（人々と現実）誌に書いたロドルフォ・ブラセーリ氏は、十九世紀の記録によると悲惨な地震がメンドサを破壊する前の数日間同地の上空を輝く物体（複数）が通過したことがわかっていると述べている。今年七月に類似の物体に関する報告類が出たが、幸運にも強震だけで終わった。FSR誌も同地区で起こった不思議な事件（複数）を扱ってきたが、特に四年近く前に発生した非常に小さな人間に関する大騒ぎの記事を載せたことがある。

さてエルサウセのメンドサ精神病院の看護婦報告に見られる最近の事件でさえも（注＝一九六八年七月二十二日の白昼、パイアブランカ付近のサンカルロスデバリローチェの空港上空に異常に長い怪物体が低空で飛来したのを多数の空港関係者が目撃した事件。サーカスのような驚くべき飛行ぶりを示したという）、一九六八年九月一日のこの事件にくらべれば顔色ない。

同日朝四時頃ヘネラル・エスペホ軍官学校の衛兵所に当直中の兵隊たちは、突然二人の青年が入ってきたのに驚いた。これは娯

楽場の従業員で、明らかにショックを受けた状態にあった。二人がまくしたてるのを聞くと、車が突然ストップしたので原因を調べようと外へ出たとき一個の円盤が地面近くにいるのを見た。そして五名の小人が奇妙なやり方で意志表示をしたあと両名の指から血液をとり、車全体に記号のような跡を残し、一条の光線に乗って物体中に入り、垂直に上昇して行ったという。

たまげた衛兵たちは自分らがそんな物を見た人を取り扱うのは不適任であると判断して、ただちにラゴマヒオーレ病院へ行くようにとすすめた。ヘンテ・イ・ラ・アクトゥアリダード誌の例の調査者によれば二人は病院へ行ったという。その後まもなく警察が関心を持ったこともわれわれにわかっている。コルドバのロス・プリンシピオス（原理）紙九月二日付に掲載された報導は、二人が軍官学校から警察へ行き、続いて病院へ行ったと述べている。

彼らの行先の順序がどうであろうと、そのとき目撃者、衛兵、病院職員のいずれにも不明な確証的な別な事件が発生していた。その一つはベルグラーノ鉄道メンドサ駅の職員が、目撃者が車がストップしたといっている時刻と同じ時に急に完全な停電があったと報告していること、他の一つは〝車の停止〟時刻から三分後の三時四十五分に、マリア・スピネリという夫人が、目撃現から六キロほど離れたドルレゴ郊外のルスリアガ通りに面した自宅から警察へ電話をかけて、一個の奇妙な光る物体が超低空で頭上を飛びまわっていたと報告した件である。

信ずべきか否か

この事件の詳細を続ける前に、この種のＵＦＯ・怪人報告に関して私の（ボウエンの）立場を再述する必要があると思う。私は、どんなにバカらしく見えても主張されたり報告されたりする物事は何でも研究者たる者は見すごしてはならないという線を持している。しかもありそうな物事なら何でも客観的に調査し記録するのがまじめな出版物編集者の義務である。これは〝信ずること〟とは根本的に異なるのであって、これについてはかつて私の見解をきわめて明確に述べたことがある。そして、われわれはあらゆる物事を見聞するべきだが何事をも信じてはならないというエーメ・ミシェルの忠告を私はためらうことなくすすめる。

そこで九月一日の早朝にメンドサで発生したと思われる事件に返ることにしよう。

怪人との出会い

異常な体験を主張する目撃者二人はホアン・カルロス・ペシネッティ（妻帯者、二十六才）とフェルナンド・ホセ・ヴィレガス（妻帯者、二十九才）である。両名はメンドサの或る娯楽場の従業員で、午前三時三十分に仕事を終えてから、ヴィレガスの一九二九年型シボレー（ナンバープレートは二九九九）で帰路についた。

二人がラプリダ通り付近のネケン通りの暗い部分へ来たとき、車が停止してライトが消えた。ヴィレガスがボネットの下を見ようとして外へ出た。

後の話だが、ブエノスアイレスのラ・クロニカ（記録）新聞社

でインタヴューの際—九月九日付版に掲載—ペシネッティは彼の時計が三時四十二分にとまったことを確認し、当初の反対の報導にもかかわらず、彼だけが時計を持っていたとつけ加えた。

彼が車外に降りようとすると、ヴィレガスが「見ろ、スキニー」と叫ぶのを聞いた。（注＝スキニーはペシネッティのあだ名？）すると二人は動けなくなってしまった（マヒしたという言葉が使われた）。そして三人の怪人と直面していた。怪人の別な二人が巨大な円型または卵型の〝機械〟の近くに立っていたが、この物体は径四メートルばかりで、高さは一・五メートルあった。物体はネケン通り二三三の一片の荒地から一・二メートルの空中に浮かんでいる。強い一条の光線が物体から約四十五度の角度で地面の方へ向けられていた。

身長約一・五メートルの怪人たちは人間の形に見えたが、頭は〝著しく〟異常に大きかった。みんながガソリンスタンドの従業員の着るような上下続きの服を着ている。相手の動作は〝おだやかで静かで〟あった。怪人たちが二人に近づいたとき相手はミゾを越えたが、ペシネッティの見たところではまるで橋をわたるように越えたという。

ペシネッティとヴィレガスの二人がいうには、相手が近づいて来たとき、次のようにくり返しながら異様に響く声を聴いた。「恐れるな、恐れるな、恐れるな」まるでトランジスタラジオに使う小さなイヤホンを耳に差し込まれたようだったとペシネッティはいう。

「恐れるな・・・」という説得するような声が絶えず響きながら、こんなふうにして二人に伝えられたメッセージの詳細をヴィレガスが話しているが、その要点は次のとおりである。「われわれは太陽のまわりをちょうど三回ほど旅したところで、太陽系内の住民の習慣や言語を研究した。太陽は太陽系をはぐくんでいる。そうでなかったら太陽系は存在しないだろう」

このメッセージなるものは次の言葉で終わっている。「数学は宇宙共通語である」

この講義が続いていたあいだ小人たちの別な一人が忙しそうに車体のドアー、風よけガラス、両側のステップなどに記号の跡をつけていった。その小人は小さな装置を使用したが、それはハンダゴテのような物で、まぶしい光を放った。（その後の調査中にドアーのパネルへガスランプをあててみたところ、塗装面は期待どおりひどく焼けたけれども、小人のつけたひっかきキズのあたりに焼け跡は残っていなかった）

次に、浮き上がっている物体の近くにテレビ受像機に似た丸いスクリーンが現われて、一連の画像が映った。最初は草木の繁った辺地の滝の光景が出てきて、次にキノコ型の雲が映り、続いて再び滝の場面となったが、水はなかった（この物語の教訓か？）。

ペシネッティとヴィレガスの確証によれば、このあと小人たちは二人の手をとり—小人たちの手は人間の手と変わりなく感じられた—、指を三度突き刺した。それから小人たちは物体の方に向かい、光線に沿って昇って行った。急に爆発現象が続いて起こり、物体は大きな輝きに包まれて空中へ上昇し、〝宇宙空間〟に消えていった。

調　査

初期の報導（ロス・プリンシピオス紙）によれば、「UFOの乗員たちが物体へ帰っていたときその一人が倒れたが、急速に仲間によって引き起こされた」という。数日後メンドサの調査員による事件の実地検証のあいだ種々の記事の相違が話題となった。これに対してペシネッティはラ・クロニカ紙で次のように答えている。「・・・彼らが倒れたというよく知られた記事の一節は間違っている。小人たちが光線に乗って昇っているように見えたとき・・・そして爆発音が聞こえたとき、ヴィレガスが「逃げろ、スキニー！」と叫ぶのを聞いた。それでわれわれは軍官学校の方へかけ出した。倒れたのはヴィレガスで、・・・私が彼を引き起こしたのだ」

また軍官学校で当直中の一兵士も爆発音を聞き、遠方に光体を見たというが、後になって本人はこれを否定した。しかし例の二人の目撃者がラ・クロニカ紙に語ったところによれば、その地区の他の数名が見たり聞いたりしたものについて証言したという。

軍官学校の衛兵所からペシネッティとヴィレガスはラゴマヒオーレ病院へ行った。そこで二人は手当を受けたが、二人に関する診察記録は次のようにほのめかしている。「精神運動の刺激による心像。左手の人差指と中指の内側に三つの小さな刺傷。両名とも一致」

そのあとセントラル病院で血液検査が続いたが、結果は否定的だった。また二日間両名は別々にされたこともわかったし、そのあいだに両名の話がそれぞれ一致したこともわかっている。

警察が介入したのはこのときだ。第六警察隊長ミゲール・モントサは目撃者が捨てた車を押収した。現場と精神病院とで自動車に対する放射能テストが行なわれたが、異常は認められなかった。

ペシネッティとヴィレガスは、両名ともカトリック教徒で、その他にいかなる宗教団体にも属さないし、いかなる団体や宗派にも属さないと断言している。

自動車の車体に残された記号類の跡を翻訳しようといろいろの試みがなされてきた。—多種類の言語と書体に通暁するゴードン・クレイトン（注＝FSR誌の編集陣の一員）は、その記号類がどうも子供じみた無秩序なもののようだという。われわれはメンドサ宇宙研究センターがヘンテ・イ・ラ・アクトゥアリダード誌の記者に次のような推測を提供したことを読んだ。

「怪人によって描かれたスケッチは二つの惑星系をあらわしている。水星、金星、地球から成る地球系と、衛星イオ、ユーロパ、ガニミデを伴う木星系である。ガニミデと地球間にはあたかも二面交通の旅を示すかのように二本の平行線があるが、これは小人たちの出身地が地球から七億七千六百万キロメートルある天体ガニミデであることをあらわしている」（本誌表紙写真参照）

スケッチに見られるひっかきキズからそんなことが推測できたというのは驚きだが、この面では私は専門家ではない。しかし私はこの推測がマヌエル・サエンズとウィリー・ウォルフ共著の著書に述べてある考え方に基づいたものであることをヘンテ誌で読んだ。私はクレイトン氏に味方しようと思う—その方が安全だ！

注　釈

入手し得た資料について、以上がさしあたって私のやれる精一

杯のことである。このセンセイショナルな事件を掲載するために当初各新聞社によるニュースの争奪合戦があったらしい。—で、それが事実だとすれば、この事件はたしかにセンセイショナルである。その後にもヘンテ誌やラ・クロニカ紙がやったような調査が合理的に注意深く行なわれたようだ。ブエノスアイレスにいる私の一通信員（女性）が語るところによると、彼女はテレビでベシネッティとヴィレガスを見たとき「両名はメンドサの官憲がいっているような〝神秘狂〟や〝売名家〟のようには見えませんでした。二人共全く普通人のようです。果たして売名家でしょうか。というのは売名をやれば職を失う恐れがあるからです。娯楽場がいいかげんな人に出納係の仕事をまかせるでしょうか。私の意見では、両名の職業は〝空想〟する時間をほとんど持たない徹底的に忙しい仕事です」と述べている。

推論

真実だとすればこれはもっときびしい調査を必要とする驚くべき事件である。それはまた(1)宇宙人説と(2)ただわれわれの幸福を願う（地球上の）どこかの人間とコンタクトしたのだと確信する人々とのいずれかに味方する人の両方を満足させる要素を含んでいる。一方、物事の暗い面を見る人のためにいうならば、あの小人たちは二名のだまされやすい人の迷惑をもかえりみずに大笑いしているタチの悪いタイプの人間だったかもしれない。

〔冗談はさておき、この事件はこの前の私の記事（FSR誌昨年九—十月号に掲載のもの）で述べた考え方と一致するだろうか。一致するといいたい。考えられるのは、目撃者の車は或る〝固体〟の物体—UFO—の出現によって停止されたのかもしれないこと、物語の残りの部分は催眠、放射線、その他何かの誘導によって目撃者の心中に注入されたのかもしれないことである。また等しく考えられるのは、小人ばかりでなく物体やその他すべての出来事の目撃は遠方から、またはあのナゾの〝他の次元〟の一つから起こされたのかもしれないことである。更に、ひどい狂気を伴って起こったので、目撃者が自分に小さな傷をつけ、自分たちの古典車にキズをつけ、小人たちとの接触を想像させられたのかもしれない。

以上は〝信念〟ではなくて単なる考え方であり、こうした物事を調査するのに私よりももっと適任の研究家の方向に対する提案である。私としては過去二十年間に聞いてきた他の多くの推測よりもその方がスジが通っていると思う。

＊　＊　＊

〈チャールズ・ボウエン氏より編者久保田宛の私信の一部〉

あなたのニューズレターを見てよい記事を掲載しているのを大そううれしく思いました。そしてあなたの読者がトピックスの処理の仕方に賛成しているのを喜んでいます。

FSR誌五—六月号でおわかりのように、ゴードン・クレイトン氏は中国語を読み書きし北京官話を話しますが、他にも多種類の言語をしゃべります。氏があなたのニューズレターを見たら興味を持つでしょう。日本語の漢字は中国文字と類似していることを氏から聞いたからです。彼は日本語は話せませんが、それを話す仲間を一人持っています。（六九年六月十七日付）

UFOと地震

ゴードン・クレイトン

ペレイロはブラジルの北東にあるセアラ州の小さな町だ。それは奇妙な三日月形地域に存在するが、そこでは通常十一年ごとに太陽の黒点数周期の極大期に壊滅的な旱ばつが起こり、多数の家畜を絶滅させ、住民を旱ばつのない隣接地域へ逃げさせるのである。（セアラ州の旱ばつと太陽黒点数の十一年周期との奇妙なつながりの科学的証明はフランシス・R・ハル陸軍中佐から提供された。中佐は十八年前ブラジルのセアラ州で私が（クレイトンが）領事をやっていたときの副領事だった。彼はこの分野で驚くべき研究を行ない、多くのブラジル役人が彼の発見事の正確さに感心していたことを私は知っている）

ペレイロは地震のために最近大いに報導されているが、この地震はペレイロ自体と近くの山々（セルラ・ドス・マカコス〈猿の山〉またはセルラ・ド・フラデ〈僧の山〉とも呼ばれる）で昨年以来ほとんど毎日発生している。この地域の主な地質学的特徴は石灰石で、最近その場所を見た多数のブラジル人科学者や外国の科学者によって地震について述べられた説明は—たしかに正しい説明だが—地下の水路が石灰石中に大きな穴をあけたため、やむなく沈下と調節作用が起こっているのだという。また実際その地域にとって地震は未知なものではない。一八九八年、一九〇九年、一九一八年はそれが著しく、一九一八年以降は文字通り無数に発生した。

現在の地震の状態は全くひどいようだ。建物は大損害を受けたし、全く見捨てられ無視されたと思っているその地域の三万人の住民のあいだで恐慌に近い状態が起こっており、彼らは窮境について何とかしてくれと大統領に嘆願した。同地の役人たちはこそこそと立ち去ったらしいと新聞は報じている。

新現象が報告された

しかしペレイロ地区の地震は新しいことではないのに、今年の三月以来の期間にそこから出た新聞報導は新奇と思われる或る特徴を含んでいる。

まず第一に、雷鳴のようなすさまじい爆発音が地震に伴うのである。第二に、〝月の二倍の大きさ〟の巨大な青緑色の火のような球（複数）が頭上のあらゆる方向に飛ぶのが見られる。この〝光体〟または〝火球〟はわずか三年前に始まったらしい。それは一八九八年、一九〇九年、または一九一八年の地震年には知られていなかったようだ。現在三万の住民のなかでそれを見なかった人はほとんどいないにちがいない。目撃者たちは次のようにくり返し述べている。「自動車の大きなヘッドライトみたいで、ときどき空中に停止したり、ときには上下に動いたり、ときには矢のように直線の水平飛行をしたりする」

ペレイロ市長によれば、物体群は形が円スイ形で、その光輝は目がつぶれるほどであり、驚くべきスピードで完全に無音で飛び、

あらゆる種類の高等飛行を行ない、しかもサーチライトのような強烈な光線を放って、それが地上の建物やその地域一帯を照射するという。物体群は毎夜定期的に出現し、しかも、しばしば着陸する、のが見られるが、ただし大体に密集したカアティンガのトゲ植物のヤブの中の近寄りがたい場所である。

無数の目撃者のなかに市会議長がいる。一九六八年七月なかばの或る夜、セルラ・ドス・マカコス地域で馬に乗っていたとき、彼は大きな緑色の光を見た。始めは説明がつかないので、百姓たちが綿を積み込んでいるトラックだろうと思ったが、まもなくその光は樹木の上に浮かんでいる巨大な物体から来ることがわかった。それが数種類の畑の上空を飛びまわるあいだ見つめたが、ついに山頂の彼方へ消えて行った。七月の始めに物体の大群が見られた。一度はそのうちの一個がペレイロ上空を低く飛び、主要教会の塔を明るい光線で照らして町中が大騒ぎになった。

着陸前に照射された光線

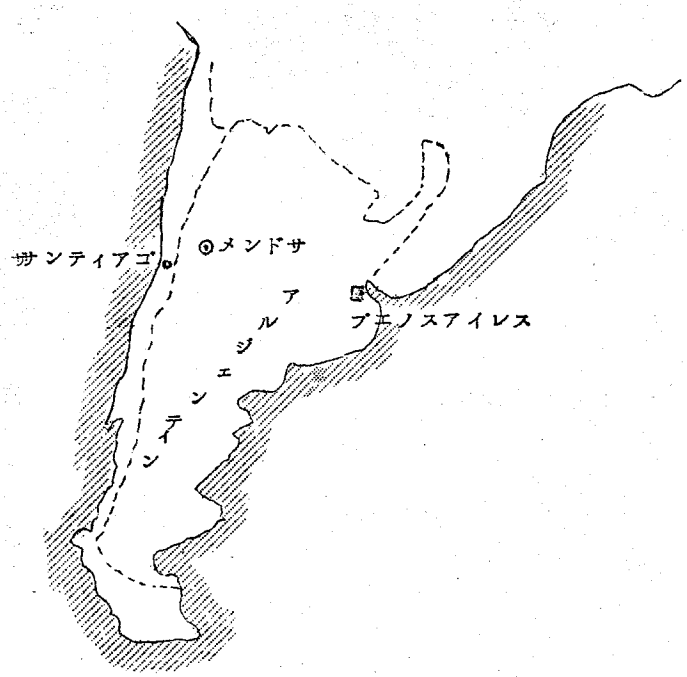
他の物体群よりもはるかに大きな一個の物体がほとんどいつもいる。この大きなやつは〝巨大なサーチライトかまたは燈台の光のような〟光線を地上に放つ。このとき小型の光体群は大きな物体よりも上空に待機する。すると大きなやつが着陸するが、その間小型光体群はずっと上空にとどまっていて、ときどき動きまわったり物体自体の輝きを暗くしたりする。すると急に大きいのも小さいのもすべて一緒に矢のように飛び立ち、一直線に空中へ上昇して消えて行く。今年（一九六八年）の八月十五日までにペレイロから出る報告は、この光体群の出現はいつも地震の起こる数時間前であることが立証されたと強調していた。「どうもこの火の玉群は地震が起ころうとする時刻と場所とを知っているらしい」と住民はいう。

メンドサでも

私が述べねばならぬ他の証拠はアルジェンティンからのもので、同国のアンデス山脈の側面にあるメンドサ市は近年UFOの報告でしばしば異彩を放っている。ブエノスアイレスの絵入り雑誌ヘンテ・イ・ラ・アクトゥアリダード（一九六八年九月五日発行）はメンドサ地区におけるUFO怪人との最近のコンタクトに関する記事を掲げた。これはFSR誌にも別な記事で扱ってある。異常に興味あるものとして私を驚かせたのは、その記事が、メンドサ地区のUFO目撃が最近始まったのではなく「メンドサUFOの歴史はほとんどメンドサ市自体の歴史ほど長い」と述べていることだ。すべての事が十九世紀中にメンドサ村（当時は村だった）を破壊した地震とともに始まったのである。その時期の記録文書は、その惨事の前の数日間不思議な物体が空中を動くのが見られたことを示している。

そしてFSR誌が続けるところによると、それ以来現世紀においてもほぼ同じ事が発生しているという。たとえば十年前にプエンテデルインカ地区の住民は、そこで一連の雪崩が起こったとき、その前の数日間不思議な物が空中に見られたと報告している。時の流れとともにこうした物事を記憶している人はもういなくなっ

たが「ついに二ヵ月前、再度UFOが最も目立つようなやり方で出現したとき、今度はひどい惨事を伴わなかったけれども、再び強い地震が同市を揺るがせて、映画館に入っていた観客は上映途中で路上へ流れ出た」という。



念写

巽　直道

左の写真は吉田旭君（二十九才）の念写です。（注＝念写というのは写真用未感光フィルムか印画紙を黒い遮蔽紙に包んで目前に置き、それに対して強烈な想念を集中させるとあたかも光に感応したかの如く何かの像が現像中に出現することがある。これを念写写真という）今年の四月二十八日午後七時ごろ郷里の兵庫県津名郡北淡町室津にある小さなお堂の中で実験したものです。アダムスキーは「当初は何度やってもうまくゆきませんが、そのうち突然成功することがあります」といっていますが、まったくこのとおりでした。吉田君の場合は二十数枚の実験に失敗していますから、今回の成功は〝突然〟といえるでしょう。アダムスキーはテレパシーの練習法としてこの念写をすすめています。ア氏の宇宙哲学を自分のものにするには、できるものから行じていくことが大切ではないでしょうか。

ミラコヴィッチ夫妻の

目撃事件

W・ダニエルズ
N・ターナー

一九六八年十一月二十日の夕方七時頃、イングランドの各地の人々がソ連の人工衛星コスモス二五三号が分解したものと正式に発表された現象を目撃した。これより約一時間半前の五時三十分と五時四十五分のあいだにヘンズフォードの夫婦とその息子がハンベリー付近で一個の円盤に遭遇した。

ミラコヴィッチ夫妻はヘンズフォードのキャノック路四三二に十一人の子供と住んでいる。この町は鉱石採掘所にかこまれたかなり小さな単調な町で、キャノックチェイスの南端から遠くない。夫妻は中年で、ユーゴースラヴィア人のミリン・ミラコヴィッチは二度目の夫で、子供たちのうちの五人の父親だが、この五人のなかに三人目の目撃者であるスラヴィッチ（十一才）が含まれる。

スクラップ商で働き、大家族の面倒をみなければならぬ夫妻は空飛ぶ円盤や宇宙旅行の物語に対する好みも時間もなかった。ドリス・ミラコヴィッチ夫人が語るところでは、彼女は以前はこんな物語をバカげたことと考えていて、西洋か日本の戦争もの〝コッケイ記事〟が好きだったという。しかし円盤問題については今や考え方を変えたといい、一方ミラコヴィッチ氏は外出するときは必ずカメラを携行することにしたと確言している。スラヴィッチは主として大気圏外の怪物や宇宙人の侵略に関するSFマンガを少し読む。

場所

ハンベリー村はスタフォードシャーとダービシャー両州の州境に位置し、アトクスターとバートノントレントをつなぐ線に沿ったほぼ真中辺にある。英国陸地測量部の地図一二〇号の参照番号は一七二二七八である。ハンベリーの北西三・五マイルの所に大きな陸軍の施設（英国電気機械技術部隊第三十二中央工場）があり、北西へ二マイルの所に英国空軍施設があって、これは主として弾薬集積所として使用される。ほとんど真南の三マイルの所に昔の戦争中の飛行場がある。

弾薬集積所の大部分は地下にあると信じられており、そこに隠された武器に関するきわめてあいまいな噂がある。古い飛行場は今もインド・クープ醸造所の軽飛行機用として私的に使用されている。

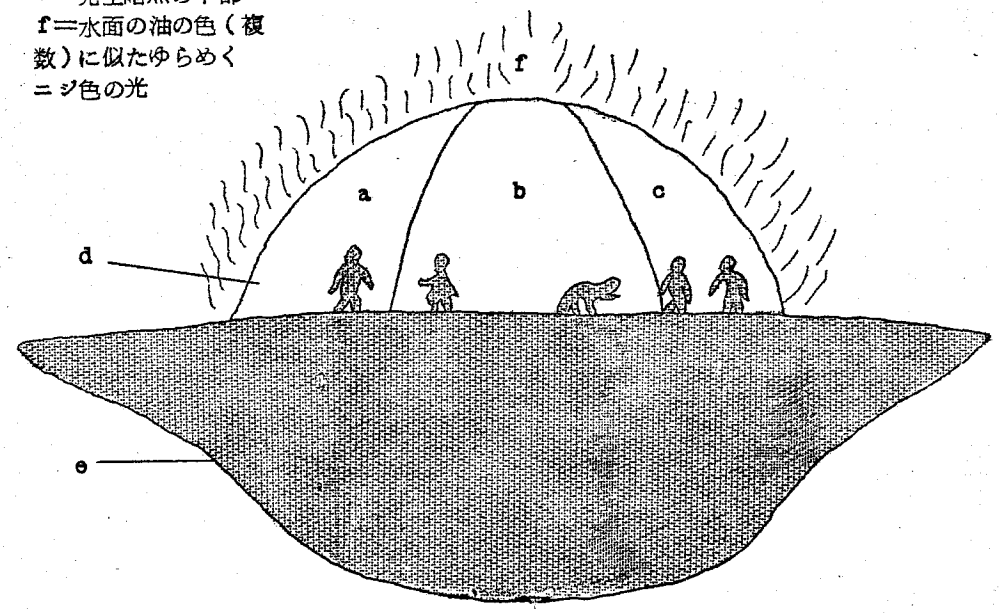
十一月二十日の午後、ミラコヴィッチ家の三名は貸家探しのドライヴを続けて、ルージリーとアボッツブロムリーを通り抜けてからハンベリーを終点とした。ハンベリー・ホールをながめた後、一同は家路についたが、ちょうど村はずれの所で、売りに出ていた別な古い家を見るために停車した。そして再びドライヴを始めたときはあたりが急速に暗くなろうとしていた。

ハンベリーを離れてまもなく一同は一匹のウサギが道路を横切って走るのを見たので、それを捕える機会について互いに意見を述べたが、驚いたことにそのときもっと多くのウサギが道路の左手の生垣の下から前のウサギに続くのを見た。突然—全く突然だったので、それは直前までわからぬ所にいたにちがいない—彼らは左手の野原に一個の強烈に光る物体を見たのだ。野原からゆっくりと上昇しながらその物体は続いて車の上を通りすぎてから（その車はすでにミラコヴィッチ氏が停めていた）、道路の右側の畑の中、約百ヤードの所に建っている一軒家の方に進行して行った。すでに車外に出ていたミラコヴィッチ親子は、物体が家の方に進行するのを見つめたが、それは家の上空に停止して浮かんだ。

ここで注釈を加えたい。そのときおそらく空は雲で覆われていて雨が降り始めたかまたは降り出してまもない頃だった。ミラコヴィッチ夫人の話では、一同が最初に車から出たとき暖かく感じたが、物体が更にむこうへ移動したとき温度が下がったようだという。目撃者たちは全然物音を聞かなかったし、物体のいかなる部分が回転するのも見なかったと確信している。ただしそれが浮かんでいるとき〝クラゲのように揺れる〟ように見えた。

ここで物体の大きさについて最初の有益な暗示が得られる。ミラコヴィッチ夫人の意見では物体は家と同じほどの巾があって、下降したならば家を押しつぶしたかもしれないという。燈火類はなかった。

約五分間一同は数名の人影を見た—黒い影からみて人間のようだと述べている—が、それらは明るく輝く上部を行ったり来たりして歩いていた。時々人影のなかの数名が物体のフチの下の何か



を見ているかのようにかがみ込むのが見られたが、ただし三種類の光と人影を除いては頂上部に何も見えなかった。

再び物体は目撃者たちから遠ざかって動き始めたが、今度だけは連続運動ではなくてその進行は震えるようなケイレンするような性質を帯びていた。動くにつれて上昇したが、光（複数）がきわめて強烈になり、あまり強いのでミラコヴィッチ氏は両眼が焼けるようだったという。

今やホネまで驚いたミラコヴィッチ氏はできるだけ早くその場所を離れようと主張した。一同が車で走り出したとき物体はまだ野原の上空に見えていた。夫人の説明では、スラヴィッチと彼女自身の感情は興奮と好奇心と不安とで混ざり合っていたし（見事な混ざり合い！）、車の故障は全然なかった。

目撃者への脅迫？

この事件の最初の記事はウルヴァハンプトン（注＝イングランド、スタフォードシャー州中部、バーミンガム北西の工業都市）のエクスプレス・アンド・スター紙一九六八年十一月二十五日付に掲げられた。われわれは火曜日の朝ミ夫人に連絡し、そのとき水曜日の夜に家族とインタヴューする手はずがととのえられた。こちらはテープレコーダーを携行したが、インタヴュー中にミ夫人はすでに目撃に関して数度の電話がかかってきたと述べた。一つはアトクスターから、一つはロンドンから、一つはリッチフィールドに住む三名の学生から、そしてわれわれからのもある。

例の学生たちは目撃事件にきわめて興味を持ったらしく、同じ目撃をした別な証人を知っていると夫人に知らせてきた。彼らは写真撮影の目的で家族を飛行場へつれて行くため日曜日（十一月三十一日）にヘンズフォードへ来る旨を夫人に知らせた。われわれが日曜日に行くことに夫人が反対しなかったので、こちらは学生たちが指示した時刻の午後三時頃家で会うことにした。

日曜日のほどよい時刻にわれわれがヘンズフォードに到着したところ、ミラコヴィッチ家は飛行場へ行くなという意味の脅迫電話を受けていたことがわかった。電話の声は男だったが、アクセントに異常はなかった。われわれは、それはおそらくイタズラだと家族を説得し、学生たちの来ぬままに事件現場へ出発したが、後にわかったところでは学生たちは全然到着しなかったという。

われわれは先にミ夫妻がたどったのと全く同じコースを行こうということになり、そして夫妻が物体を認めた場所を指示してもらおうということになった。一行はハンベリーまでドライヴしてから折返し、あの夜家に向かって出発する前に夫妻が吟味した最後の家を通過した直後ミ氏は車を停めて、ここが自分たちが物体を見た場所だといった。

ところが彼は間違った場所を選んだことがわかった。というのは上空に物体が停止するような家はなかったし、付近に存在するはずだと彼が考えたらしい飛行機の格納庫もなかったからだ。それでわれわれは彼を説得して、まだその家を見つけるチャンスがあるかもしれぬということでドライヴを続けさせた。ところでミ夫人は夫の場所の選択に同意しないので、ミ氏は全く迷ってしまった。もっとも彼は自分が選んだ場所こそ正しいと確信していたのだが！。

約三十分間われわれはその地域を走りまわって、ついに今夕はこれ以上何も得られないだろうときめた。なぜならミ夫妻はその場所を見つけることができず、しかも「すべてはウソだったのだ」という印象をこちらが受けはしないかというわけで夫妻がイライラしてきたからである。

追跡調査

ミ夫妻が出発してから、われわれはあの捕えにくい家と飛行機の格納庫が見つかりはしないかとその地域を走りまわったが、これとおぼしき家は見当らなかった。しかしミ氏の語った話にぴったりの格納庫を見つけた。

たぶんこの段階で飛行機格納庫の問題を詳述せねばならぬだろう。述べておかないと状況が複雑になりやすいからだ。ミ氏が行きか帰りのドライヴ中の或る時に主張したのだが、彼は格納庫を見たことがあり、それが或る種の飛行機を見たという考えを始めに与えたというのだ。行きのドライヴでわれわれは飛行場の近くへは行かなかったし、ハンベリーをわれわれが離れた様子からみても彼が帰りのドライヴ中にも格納庫のそばを通りすぎたとは思えない。これからみて彼がハンベリーまでたどった正確な道筋と—かなり安全な憶測をすれば—正確な目撃現場とを忘れてしまったと思われるのだ。われわれは目撃現場が飛行場でなかったことに満足する。なぜならミ氏は最初あの物体を飛行機だと思ったために、そこが飛行場だと思ったと主張したからだ。彼は物体と同時に格納庫を見なかったのである。

状況はわれわれを挫折させるようになってきた。ミ氏は正しい場所へわれわれを案内したと主張して、ハンベリーへはもう行く必要はないと考えているからである。ただし現場に家がなかったという事実を彼は依然として説明できない。ついでながらミ氏は果断な人で、ひとたび何かの特殊な問題でこうときめたら決してあとへひかない。スラヴィッチは父親を怒らせることを恐れて多くを語ろうとはしない。

しかしミ夫人は未来に対する望みを持ち続けている。彼女は一行が正確な道筋をたどってハンベリーまで行ったり帰ったりしたのではないと主張し、しかももっと頼もしいのは、もう一度ハンベリーへ行けばきっと家を見つけるかもしれないといっているからだ。おまけに彼女は最初のドライヴで道がわからなくなったので、ハンベリーから約四マイルの白い小舎に住んでいる老夫婦に方角を尋ねる必要があったといっている。われわれはこの小舎の所在地を探しあてたと思っているが、訪問したときはだれもいなかった。

問題

二度の機会にわれわれはミ夫人をハンベリーへ連行する手はずをととのえたが、最初は彼女が思いがけなく用事で外出しており、二度目は家族が家庭的な危機に見舞われたところだった。ただしこれは目撃事件とは全然関係のないことである。

われわれはミ夫人が再びこちらへ連絡するまで調査を一時中止することにきめた。夫人が連絡すると約束してくれたのだ。

一方、この記事の共同執筆者の一人がハンベリーとその周辺の地域の調査を続けていたが、だれも異常な物を見たおぼえはないという。ハンベリーに最も近い村のドレイコットインザクレイの警察は役に立たなかったし、最も近い大きな町のアトクスターの警察も同様だったが、両方ともきわめて協力的だった。同様に、アトクスター、バートノントレント、リッチフィールド、ルージリーの各新聞社も何の情報も持たなかった。また飛行場の職員も同様だった。一機の軽飛行機が目撃事件の頃に着陸したらしいが、これはおそらくミラコヴィッチ夫妻が見た物ではないだろう。

興味ある点として、夫妻はそれぞれ時計を持っているが、目撃事件以来それが遅れるようになった。おそらくこれは時計が磁化されたのかもしれないと思われる。夫妻の自動車の磁化を見つけようとしたが車を検査することはできなかった。

最後に一つ。リッチフィールドの例の〝学生〟から更に二回の電話がかかってきた。それでわれわれは、この次かかってきたら先方の住所を聞くようにと夫人に頼んでおいた。いずれの電話の場合も学生たちは別な写真撮影旅行の準備をしたがったが、現在まで何も実現していない。

ウィルフレッド・ダニエルズのあとがき

ミリン・ミラコヴィッチは次のようにいっている。これは彼の妻も同意したことだが、物体が建物の上空で約五分間停止した後に動き去るにつれて一連の波状運動を行なった（彼はこれを説明するために掌を水平に上下させた）、そして飛んで行きながらムラなく上昇して行った。

ミラコヴィッチは多大の勇気を持つ人のような印象を与えるが、それにもかかわらず、その波状運動による進行はすっかり彼をおびえさせた。彼は妻と息子を車に押し込んで急いで現場を離れた。

レーダーマン　高橋忠春氏

世に霊能者・予言者と称する人は多いけれども、トップクラスをゆくのがこの高橋氏（七十才）であろう。人呼んでレーダーマンまたは奇跡の人として名高い氏の予言の適中率は九十八パーセントという驚くべきもので、しかも氏の描かれた〝開運色紙〟を室内に飾れば不思議に幸運が訪れるという種々の実例はかつて〝女性セヴン〟にも紹介されて話題となった。五才の時日露戦争を予言して人々を驚かせた氏は、以来その神秘的な霊能力によって無数の人を実際に助けてこられたのであって巷間の占い師とは根本的に異なる。万人の顔がみな違うのと同様に筆跡もみな違うため、筆跡を見れば本人の運命がわかるのだそうで、運命鑑定希望者は鑑定料二千円を添えて自筆の質問書と年令を書いて左記宛に送れば、ていねいな予言と色紙がいただける。

東京都中野区中野三―五〇―一九　高橋忠春

かつて洞爺丸が沈んだとき一旦乗船した氏は船名がかすれて見えたために惨事を予感してボーイとケンカしてまで無理矢理下船して助かった。氏の予言によれば今より五年後にアダムスキーは世界的に認められるようになり、同時に日本GAPも都内にビルを持って大きく発展するという。編者個人に関してもきわめて興味深い予言がなされている。（久）

編集後記

◎本号は大体に五月末に刊行予定のところ、編者の一身上の問題について種々の不測の事態が生じたために遅れてしまい、全く申訳ありません。今年は日本GAPにとって一大転機の年になると思いますが、発展こそすれ衰微することはないと明るい希望を持ち続けています。よろしくご支援をお願い致します。

◎近年米国のコンドン報告、宇宙飛行士らの報告等からしてUFOは実在しないという概念が一般化しつつあるように思われますが、とんでもないことで、世界中に依然としてUFO目撃報告が行なわれており、本号はコンタクト特集号として重要な事件類を掲載しました。記事の殆どは英国の一流研究誌FSR（フライイング・ソーサー・レヴュー）から採ったもので、真ぴょう性の高いものばかりです。

◎米国ケアリフォルニア州ヴァリーセンターに住むシャーロット・ブロップ女史は元アダムスキーの弟子で、現在は単独でGAP活動を行なっていますが、最近同女史から編者宛に生前のアダムスキーの講演を録音したテープ（七インチ）が送ってきました。A面は一九六五年四月（死の直前？）の講演「宇宙哲学」B面は講演「人間の四感」「人間の創造」「生まれかわりの段階」大学生たちとの「質疑応答」となっており、録音時間は全部で三時間という堂々たるものです。ア氏の声は七十数才とは思えぬほど若々しく、内容は立派なものです。これを全部訳して本誌に載せる余裕は目下ありませんが、いずれ何かの会合の際に公開します。貸出しやコピー録音は致しません。

◎絶賛を博しました「死と空間を超えて」はおかげさまでついに品切れとなりました。本会としては再版の見込はありませんが、内容を少し省略して題名を変えたものが高文社から刊行される予定です。詳細は同社編集部登坂治彦氏宛直接ご照会下さい。

◎先号のPR欄で「宇宙哲学」は品切れになった旨をお知らせしましたが、その後某所に少々在庫していたことが判明しました。目下二十部ほど編者の手元にあります。一部三百円、送料四十五円。「生命の科学」はまだ在庫多量にあります。一部三百円、送料五十五円。ニューズレター旧号は次のものが編者方に残っています。第33、34、35号（以上各百三十円）36、37号（以上各百五十円）。第38号は好評裏に品切れになりました。

◎以上の他にニューズレター旧号複製本（謄写刷り）の次のものが左記に残っています。注文は必ず左記宛にして下さい。一九六一年1・2号（七冊）3号（十冊）4号（一冊）5号（六冊）6・7号（十三冊）一九六二年7・8月号（五冊）以上送料共各百円。申込先は

東京都大田区千鳥一ー十六ー十五、紀陽荘、　楠元幸二

◎すでに紹介しました専門誌「テレパシー」最近号（第十号）のUFOと超心理特集号として充実した内容は一読に価します。左記宛直接お申込下さい。

新潟県中蒲原郡横越村横越　超心理研究会　一部二百円送料五十五円。

◎本誌にたびたび科学記事を寄せられた村山光一氏は、今年八月に東京で開催の第八回国際宇宙科学シンポジアムにおいて日本代表の一人として「量子電磁宇宙機」と題する研究発表を行なうことに決定したそうで、ご奮闘を期待します。

◎編者の訳出になるUFO関係翻訳書計七点が、松江市の島根県立図書館にある郷土資料室郷土人文庫に収められ永久に保存されることになりました。

◎日本GAP東京支部の月例研究会は毎月行なわれています。詳細は本誌第35号の編集後記をごらん下さい。

日本GAPニューズレター　1969　第三九号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP

698　島根県益田市益田古川

振替・松江　二六三〇
（久保田八郎個人名義）

頒価一五〇円・送料三五円

昭和44年6月30日発行

不定期刊

★禁無断転載